

第241回 今月読んだ本  
橋田邦彦（1882－1945）の「科学する心」をめぐって  
（1）

4月13日（土）午後、倉吉シティホテル（鳥取県倉吉市）において「倉吉中央ロータリークラブ創立30周年記念式典」が盛大に挙行された。本稿は、配布資料（パワーポイント投影用）をもとに再現した「創立30周年記念講演」である。

なお、橋田邦彦の著作と思想の詳細については、拙著『橋田邦彦・アーレント・現象学の再解釈－生活世界における公共性と倫理』（小取舎、2023年、以下『再解釈』）を参照されたい。

倉吉中央ロータリークラブが創立30周年を迎えられましたこと、誠にありがとうございます。このような栄えある記念式典にご招待いただき、しかも記念講演を仰せつかることになり恐縮しております。70分ほどお時間をいただいています。少し込み入った話も出てきますが、ご寛恕願えれば幸いです。

さて、倉吉中央ロータリークラブは、橋田邦彦の顕彰活動を積極的に行ってきました。（橋田「先生」とお呼びしたいのは山々ですが、歴史的な人物ですので敬称を略します。）

お手許の資料にある2000年12月23日付、2015年9月17日付の日本海新聞の記事をご覧ください。前者には「『科学する心』賞」（1995年～2001年）贈呈式の様子、後者には没後70年の命日（9月16日）に会員の皆さんが墓参する様子が写真入りで詳細に記載されています。

橋田による造語「科学する心」は、科学技術立国・日本の土台を支える精神です。とりわけ次世代を育てる教育実践においては最重要の概念です。橋田と「科学する心」の顕彰を行っている倉吉中央ロータリークラブの会員の皆さんに敬意を表したいと思います。

本日お話しする内容は以下のとおりです。

1 はじめに

- 2 「科学する心」とは何か
- 3 橋田の生涯を振り返る
- 4 橋田に対する誤解を解く
- 5 「科学する心」をどう生かしていくか
- 6 おわりに

前置きが少し長くなりました。可能であれば準備した内容を端折ることなくお話ししたいので、要領よく進めていきたいと思えます。

## 1 はじめに

私が橋田邦彦の事績を知ったのは大学3年の時でした。寺崎昌男教授の講義「日本教育史概説Ⅱ」の中で、先輩の清水康之さん（面識はありません）の論文が参考資料として配布されました。タイトルは「橋田邦彦における科学と教育の思想－戦時下教育思想研究への一視角－」（教育史学会『日本の教育史学』第25集、1982年）。今は便利な時代になり、こうした論文もネットで簡単に読むことができます。興味のある方は読んでみてください。

太平洋戦争開戦時の文部大臣が橋田邦彦であることは、日本教育史の文脈では必ずどこかで学びます。それまでも橋田の名前はどこかで読んでいたと思います。しかし、具体的に何をした人なのかは知りませんでした。

橋田が倉吉出身であることは清水論文で初めて知りました。高校の大先輩であることも。高校時代、「同窓の偉人」として奥田義人（東京市長、文部大臣）、澤田廉三（初代国連大使）らの名前を聞いたことはあっても、橋田の「は」の字も耳にしたことがありませんでした。教育史では著名人であるのにもかかわらず、なぜ「郷土の偉人」でないのか、と訝しく感じたものです。

清水論文に刺激されて、橋田の著作を読み進めました。橋田が道元に私淑したように、私は橋田を通して道元に私淑？した気になっていた時期もあります。若気の至りでお恥ずかしい限りです。

『再解釈』所収の拙稿「橋田邦彦の思想とその源泉－総力戦体制下の科学と思想」（1993年）を書いたのは、勤務校（母校）が創立120周年を迎えるにあたり、

知られざる卒業生の業績や思想をきちんとまとめてみよう、と思ったからです。関係者にも広く配布された学校紀要（創立 120 周年記念号）掲載の拙稿は全く反響がありませんでした。拙稿の内容が文字通り拙かったことが最大の原因でしょう。また、橋田は同窓生の中でもほとんど知られておらず、「橋田 Who?」と思った人も多かったのではないかと思います。

昨年（2023 年）、拙著を刊行したのは、科学（日本科学史）や教育（日本教育史）の世界でビッグネームであった橋田邦彦の本格的な研究が、30 年経っても進んでいないからでした。

科学思想史、現代科学論を研究する金森修は、論文「橋田邦彦の生動と隘路」（『自然主義の臨界』勁草書房、2004 年）の中で、こう書いています。「橋田の独創的な模索が、その後の我が国の科学にほとんど痕跡を残していないように見えることが残念でならない。」

もちろん、橋田に言及する論文、研究書はいくつかあります。勝井恵子「橋田邦彦研究—ある「葬られた思想家」の生涯と思想—」（日本医学史雑誌、第 56 巻第 4 号、2010 年）。成書に所収されている論考としては、吉仲正和「橋田邦彦の科学思想」「橋田邦彦の生理学思想の変遷」（『科学者の発想—ガリレオ、ニュートン、寺田寅彦、橋田邦彦』玉川大学出版部、1984 年）、岡本拓司『近代日本の科学論—明治維新から敗戦まで』（東京大学出版会、2021 年）の第 11 章「日本文化としての科学」第 2 節「第一高等学校の橋田邦彦」、第 12 章「科学する心—文相橋田邦彦とその周辺」。岡本の著作（全 552 頁）には巻末に詳細な人名索引があり、橋田は田辺元に次いで 34 箇所となっています。田辺と同列であることは重要人物であることの証左となるでしょう。

ところで、高橋琢磨『葬られた文部大臣 橋田邦彦—戦前・戦中の隠された真実』（WAVE 出版、2017 年）があります。橋田が描かれているのは全体の 3 分の 1 ほどで、ほとんどの箇所に典拠が示されていません。時代背景については勉強になりますが、『小説 橋田邦彦』として読むべきでしょう。

なぜ、戦前の科学界、教育界で影響力をもった橋田が忘れ去られ、彼の科学思想、科学教育、科学政策への寄与についての研究があまり進まないのでしょうか。

## 2 「科学する心」とは何か

まずは、橋田思想の中心概念「科学する心」について説明しましょう。

ウェブ上で「科学する心」を検索すると、公益財団法人ソニー教育財団が真っ先にヒットします。幼少期からの自然とのふれあいや実体験を伴う「驚き」「感動」を「科学する心」と捉え、子どもたちを対象とした体験型プログラムを展開し、幼稚園、保育所、認定こども園、小学校、中学校の教育支援を行っています。そこには「科学する心」の提唱者である橋田の名前は出てきません。

本では、池澤夏樹『科学する心』（集英社 2017 年、角川ソフィア文庫 2023 年）がヒットします。この本は池澤が興味をもった題材を取り上げた科学エッセイです。橋田については冒頭でごく簡単に触れられます。「「科学する心」というと新しげに聞こえるけど、これは 1940 年に作られた言葉である。そのずっと後にしばらく流行した「お茶する」などと同じで、名詞的な熟語に「する」がつくからちょっと新鮮に聞こえる。これが「研究する」ならば平凡なのは「研究」が動詞的な熟語だからだ。だから「科学する心」はいかにもコピーライターの一工夫という印象になる…」（11 頁）

私たちは、西周が「哲学」「藝術（芸術）」「科学（科学）」「技術」「心理学」などの語を造った（創った）ことを意識せずに、それらの言葉を使っています。「科学する心」に言及する際に「橋田に触れないとは怪しからん」と思う人はいないでしょう。

橋田思想の 3 つの源泉は、①幼い頃から親しんだ陽明学（王陽明）、②ヨーロッパ留学中に読み込んだ当時の新思潮である前期現象学（フッサール）、③「生命とは何か」に悩み出会った『正法眼蔵』（道元）です。①からは「科学する心」、②からは「自然と人」、③からは「行としての科学」の諸概念が生まれてきます。やがて、現代物理学（量子力学、相対論）に①②③を加えた橋田思想を包括する概念として「自然即人生即世界」にまとめられます。

橋田思想の詳細および発展については『再解釈』を参照してください。少しややこしい話になりますので、ここでは簡単に述べるにとどめます。

「科学する心」という言葉の初出は、1940（昭和15）年7月の文部大臣就任後、読売新聞に3回にわたり掲載された三木清との対談「文政革新の方向について」（8月1・3・4日）でした。さらに8月14日の講演「科学する心」が10月30日に教学叢書（50頁）として刊行されます。橋田は三木との対談の中で、「科学する心」とは「科学精神」と同じものであり（戸坂潤ら左派陣営が使っていた「科学的精神」とは一線を画しています）、科学が抽象的なものと捉えられてはならないために、具体的実践の意味をこめて「科学する心」という表現を用いる、と語っています。橋田の考える「科学」とは、自然科学と人文科学の双方を指すとも。

優れたネーミングである「科学する心」は、科学を「行」という人の「働き」を介した「動態」「過程」として捉える発想に支えられています。「本当の科学」は「知識体系としての固定化した科学」ではなく「動いている科学」ではなければなりません。

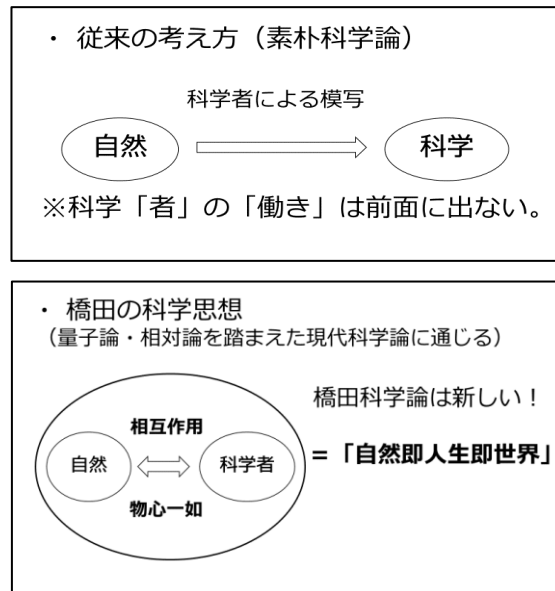
「科学する心」には3つの問題系が存在します。（ア）科学的認識の「リアリズム」の問題、（イ）科学の「実践的性格」の問題、（ウ）科学の「道徳性（倫理性）」の問題です。それぞれの問題系の特徴を列挙してみると次のようになるでしょう。

（ア）時々刻々動いてやまない動的全体（全機）を物事の底まで見透す直観＝「物心一如」＝「自己他己不一不異」。（イ）科学的主体（人の働き）の確立＝「自己を知ること」、「実験室」＝「道場」、「一者三面」としての「学」・「術」（具体的運用）・「道」。（ウ）「体験の世界」に根拠をもつ「思惟の世界」が「人生」につながることによって、科学を通じた「徳」の完成が可能になる。（ア）（イ）（ウ）から導かれたのが橋田の座右の銘である「学道不二」「唯従自然」（打吹公園頌徳碑）です。

橋田思想の意義は、「科学者の主体性」に着目し、「科学の倫理性」を視野に入れていた点にあります。図解すれば、下記のようになります。

SDGs（持続可能な開発目標）やGX（グリーン・トランスメーション）の語が飛び交う現代社会では、も

はや素朴科学論を信じる人はいないでしょう。しかし、橋田の生きた時代では、自然と人間の相互作用は常識ではありませんでした。橋田の図式は当時の最先端の考え方であり、知識層でも理解できない人たちが大半だったのでないでしょうか。



当時、最高の知識人の一人であった高山岩男は、橋田の代表作『碧潭集』（岩波書店、1934年）を次のように評しています。少し長くなりますが、引用しましょう（『思想』第151号、1934年11月）。「自然は「ノエマがノエシスを包んだもの、主観が働きとしてのみ没入した世界」である故、所謂主観的構成の如きも実は自然の中に於いての事柄でここより自然科学も記載に尽きると云うのが著者の主張である。（中略）評者は主知主義的な在来の認識論の立地と異なって科学者や観者を自然の中に入れて主体的な別個の立場より機械論と目的論を考察されようとする試みとして僅かな論文ではあるが相当注目すべき論文を考えこれを紹介したいと思うのである。（中略）評者は生理学者たる氏がかかる立場より断片的にせよこれらの事柄に深い示唆を投げかけるものとして、論の正否、徹底不徹底を問わず貴重なる論文として一応省みるべきものありと思うのである。」（旧仮名遣いを現代文表記に変更）

西田幾多郎門下の「京都学派四天王」と呼ばれた高名な哲学者らしい書き方で、一読しても何を言いたいのかわからない、というのが正直なところではないでしょうか。「貴重なる論文として一応省みるべきものあり」と

というのは、哲学者・高山が科学者・橋田による試行錯誤の思索に対する最大級の褒め言葉でしょう。

哲学の話をこれ以上続ける気はありません。次に、「科学する心」を生み出した橋田の生涯を簡単に振り返っていきます。